北海道パレスチナ医療奉仕団による

「中村哲医師追悼」
「第 13 次医療 子供支援活動帰国報告会」

2020/ 1 /25 (土) 18:00 開場 18:30 開演

会場：札幌エルプラザ３階ホール　会費:500円（学生以下無料）
札幌市北区北8条西3丁目　札幌駅北口　お問合せ：猫塚（090-8274-3163）

第一部　中村哲さんを悼んで

去る 2019 年 12 月４日　アフガニスタンで凶弾に倒れたペシャワールの会の中村哲医師を会場参加の皆さんとともに偲びたいと思います。

またこれまでの活動やその根底にある思想について中村氏と交流のあった方たちのお話を交え、見つめなおし、これからの私たちの進むべき方向について考えていきたいと思います。

第二部　北海道パレスチナ医療奉仕団「第 13 次医療 子供支援活動」帰国報告会

皆さんからの温かいご支援により、2019 年 10 月 20 日～ 11 月 10 日の期間、私達は「第 13 次医療・こども支援活動」を実施することができました。心から感謝する次第です。

パレスチナとイスラエルをめぐる状況は、トランプ米大統領に後押しされたネタニヤフ政権による「ジェノサイド（民族絶滅政策）」が一層深刻化されています。イスラエルによるガザ地区の「完全封鎖」も 12 年以上経過し、ヨルダン川西岸では「入植地」のイスラエル領土化宣言が公然と行われました。

そうした中で、これまでの医療活動とともにガザ地区でのリハビリ技術講演活動や子供支援活動としてバレーボール・絵画活動を実施いたしました。今回は、総勢７名の活動でしたが初めてマスコミ関係者の参加があり、現地パレスチナ人からの「生の声」を聞く証言活動に着手いたしました。また、若手メンバーや医学生の参加は今後の「奉仕団」の活動の未来を切り開くものでした。

今回の「報告会」では、参加したそれぞれのメンバーからの思いも含めの報告が行われます。皆様のご出席をお願いする次第です。

北海道パレスチナ医療奉仕団　団長　猫塚義夫

現地の女子学生とバレーボールを通じ交流する細川さんと清末さん

ガザ境界周辺で「封鎖の解除」を訴える市民たちと奉仕団のメンバー

子供の下肢の状況を診察する猫塚医師

難民の診療に参加する医学生・宮岡さん

主催：「北海道パレスチナ医療奉仕団」
共催：「医療９条の会・北海道」、「高崎法律事務所・９条の会」

お問い合わせ先　北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚（090-8274-3163）
065-0019 札幌市東区19条東22丁目５-13　Mail:hokkaido.palestine@gmail.com

追 悼 声 明

～「ペシャワール会」現地代表・中村哲先生の死を悼んで～

2019年12月7日 「北海道パレスチナ医療奉仕団」

去る2019年12月4日午前8:00頃（現地時間）、中村哲先生は、アフガニスタン東部ジャジャラバード近郊で武装集団に急襲され、死亡されました。

こうした事態にあたり、私達は中村先生のこれまでのアフガニスタンにおける難民支援活動に敬意を表し、心から哀悼の意を捧げます。

30年間にわたるペシャワール会と中村先生による難民支援活動は、当初の医療活動から「命の水」を求めて1600ヶ所の井戸を掘削し、更に灌漑用水路の開発へと活動を前進させました。その結果、戦乱・貧困と干ばつで荒れ果て砂漠と化していた農地に緑が回復し、多くの住民が農村に帰ることができました。

こうした成果もアフガニスタン復興の第一歩と考えていた中村先生にとり、これからに備えての活動中に受けたのが今回の凶行でした。断じて許すことのできない蛮行です。同じ難民支援を志している私達にとって慙愧に耐えません。

2011年5月札幌の講演会にお招きした際、結成まもない私たちのパレスチナ難民支援活動について大きな関心を示し「小さな希望でも実現するために力を尽くしなさい」「ケガや病気の背景にある戦争や貧困をなくすることも大切な仕事」と語られました。また「武器ではなく命の水を」「100万発の銃弾より、1本の用水路」の信条は、非武装・非武力を掲げる私達の難民支援活動に大きな力をもたらしてくれました。

一方、中村先生は日本国憲法、とくに憲法9条を守り発展させることにも積極的に発言してきました。「日本国憲法は、私達の理想。理想は、守るものではなく実行するもの」などの言葉で憲法への思いを語り、安倍政権が主導している集団的自衛権の行使に反対してきました。

このように人々の平和な暮らしを求めて、アフガニスタンや日本国内で行われてきた中村先生の思想とそれに基づく実践は、これからも多くの人々により継続・発展させられてゆくものと確信しています。

今後、私達は、パレスチナ難民支援活動をより一層発展させることに力を注いで行くことが中村先生の御遺志に応えるものと考え、これからの更なる努力を重ねてゆく所存です。